

5 講演録

「本は生きる力～棕鳩十の思いをつないで～」

児童文学作家・棕鳩十研究家 久保田 里花



皆さんこんにちは。今日は祖父の生誕 120 年と親子読書 65 年など、記念の年に、祖父のことについてお話させていただく機会をいただき、大変うれしく思っています。

「祖父の思いをつないで」というテーマでお話させていただきますが、90 分と長いので途中で 1 回、お休みが入る予定です。私の話は祖父の思い出話などいろいろありますので、気楽に聞いていただけたらいいなと思っています。

今ご紹介いただきましたように、私は祖父と子供のころから一緒に過ごしてきたんですね。祖父にだっこしてもらうのがとても大好きで結構大きくなるまでいつもだっこしてもらっていましたが、祖父が、いつも家で自慢していたことがあるんです。

「おじいちゃんは、里花の歯をね、お父さんとお母さんよりも早く、一番最初に見つけたんだよ。だっこして手で口をこう、手を入れて探っていたら、ざらざらとしたのを見つけたんだ。」ってそれが自慢だったんですね。だっこしながら、祖父がいつも子守歌を歌っていたんです。私の祖母は、「自分の子供にも歌ったことない初めて聞く子守唄だ。」と言っていました。私の母も、「こういう子守歌は聞いたことがないな。」と言っていました。ただ、祖父は、実はもう、本当に、本当にすごく音痴で、音程がないっていうか、なんかもう本当聞いてられないぐらい音痴だったので、私の母は、「ありがたいな」って思いながら、いつも「どうしよう」と思っていたらしいんですね。「こんな歌を聞かされていたらすごい音痴になる」って思っ

私も祖父の音程のない子守歌なのでよくわかんないんですけど。「♪ねんねん

私も祖父の音程のない子守歌なのでよくわかんないんですけど。「♪ねんねんねこじまの 何とかおとめ♪」っていう……すいません。私は祖父の歌を聞いて育ったので音痴なんですけど、私、猫が大好きなので、猫がいっぱいいる島、なんか、猫島の女の子たちがいる歌だと、勝手に思っていたんですね。今から、5、6年ぐらい前に、西日本新聞社さんと一緒に北原白秋記念館の方が、ちょっとうちへ取材で訪ねてこられたときに、いろいろお話ししたんですけれども。うちの祖父が「ねんねんねこじまの何とかおとめ」っていう子守歌をいつも歌ってくれていたって話をしたんですよ。そうしたら、北原白秋さんっていう方は、失われゆく地域の独特の童歌を収集されて、唯一その本を作られた方っていうことで、早速調べてくださったんですね。

そしたら、「寝いんね、こじまのきゃんきゃら乙女」みたいに、全然猫とは関係ない子守歌だったんですけれども。祖父は長野県の伊那谷地方といわれるところの出身ですが、伊那谷に伝わる子守歌だったみたいなんですね。私、その後、長野の祖父の記念館の方々に聞いてみたんですけれども。いろんな方に、顕彰会の方とかいろいろ尋ねたんですけど、誰もこの歌知らないと。

多分祖父が、いつも自分をかわいがってくれていた、おばあちゃん、ばば様から聞いていた子守歌を、私に歌ってくれていたんだなあって思いました。そうやって祖父は、子守歌とか、わらべ歌なんかを結構、歌ってくれました。あんまり歌が音痴なのでアレなんですけど。七草の時に、「♪ななくさなずな……♪」とか、「♪とうどのとりが……♪」とか、何かあるたび言っていたなっていうのは思うんですね。

私は祖父から、本当にいろんな話を聞いて育ったんです。祖父が話すと本当に面白かったんですけど、古事記とか、多分、今昔物語みたいなものとか、民話ですとか、説話ですとか。世界のいろんな物語も何の話なのかわからないけど聞いていて、あとで「ああ、この話だったのか」っていうものがあったりとか、動物の話とか、祖父が作った話とか、そういう中に思い出話っていうのも、いろいろあったりして。さっきご紹介いただいたように、私は祖父の伝記を書いたんですけれども。伝記を書くときに、いろいろと祖父の書いているものとか、エッセイとか読み直して、「あ、おじいちゃん本当に私に自分のこといっぱい話してくれていたなあ」って思ったんですね。

祖父も時間がいっぱいあったっていうより、本当に忙しかったんですね。書くものもどんどんどんどん依頼が来ていましたし、月の半分ぐらいは取材であっちこっち行って。やっぱり祖父は取材でものを書く人なので、あちこち取材に行っていましたし、あと、講演もすごく多かったんですね。家にも、もうひっきりなしにお客さんが来るんです。お客さんが来たらどんなに忙しくても「どうぞ、

どうぞ。」って言って家に上がってもらって。祖父の話が楽しくて、午前中に来た人は、お昼ご飯まで。午後から来た人は「一緒にお風呂入らないか。」って言ってお風呂に入ってもらったり、夜ご飯を食べたりとか。出版社さんもちょうど全集とか、いろいろできているときでよく来られました。ホテルをとっていても、「うちに泊まってけ、ホテルキャンセルして泊まってけ。」って言って。画家さんたちもいろいろ来るとかで、もう本当に忙しかったんですけども、「どんなに忙しくても時間っていうのはつくれるもんだ」という感じで、本当にご飯一緒に食べる前とか後とか食べているときとか、小さいときは、一緒にお風呂に入るときとかね。もう、何かちょっとしたときに、ずうっと話してくれていたんですね。

この伝記のあとがきにも書いたんですけど、祖父は私が高1のときに亡くなったんですが、高校のときに、家で過ごした最後の日の夜まで祖父は話を、ほんのちょこっと短く数分ぐらいの話なんですけど、してくれていました。

また伝記は読んでもらえたら嬉しいと思いますが、伝記には、私の思い出は書けないので、その伝記に書けなかった思い出みたいなのも今日は、ちらちら言いながら祖父のことをお伝えしたいなと思います。



祖父は、動物児童文学の第一人者って言われますが、それは日本で初めて、本格的な動物の児童文学のジャンル、そういう物語を作ったっていうところから、そう言われているんですね。ただ、家では、児童文学作家とか童話作家とか言われると、「俺は戦時中、たった15、16遍の動物ものを書いたばかりにそういうレッテルを貼られてしまって、他のものがなかなか書けないよ。」って冗談交じりに言っていました。でも、日本で初めてそういうジャンルを作った祖父なんですね。

椋鳩十というと、やっぱり誰もが思い浮かべるのが、「大造じいさんとガン」ですけども。栗野岳が舞台の、これは1941年、80年以上前に書かれた物語で、祖父は、1951年以来、ずっと70年以上、学校の国語の教科書に掲載され続けている作家なんですね。それだけ長く掲載されている作家っていうのは、日本では宮沢賢治さんと祖父と新美南吉さんと、この3人って言われていますので、それだけ長く作品が国語の教科書に載っている作家だっていうのも、ちょっと知っていただきたいなと思います。



椋鳩十ってどんな子供だったの。ということなんですけれども。生まれたのは、さっきお話ししましたように、長野県。長野の中でも、南信地方って言って、南アルプスと中央アルプスに囲まれたところ。今でも行くのがとっても不便なところなんですけれども。もう少ししたらリニアが、ここの喬木村のすぐ15分ぐらいのところに駅ができるらしくて。東京まで30分ぐらいで行けるようになるようですが。今は、東京からバスで4時間半ぐらいなんです。そういうところで育ったんですね。

家族は6人家族で、お父さんは、村の文化人的な存在だったんですが、牧場を経営していて、狩猟に祖父をよく連れていっていたそうです。お母さんは、当時、珍しい職業婦人っていいですか、お産婆さんで、伊那谷一のお産婆さんだったんです。今でも、新聞に広告記事があるのを見たことあるんですけれども、伊那谷一っていうことで、何人か看護師さんも雇っていて、診療時間も、午前中診療して、お昼ちょっと休みがあって、またずっと夜までってね。とっても、忙しいお母さん、働くお母さんだったんですね。その代わり、家にいつもいてくれたのが、おばあちゃん。「ばば様」って言ってましたけど、このおばあちゃんが、いり端で、毎日毎日、祖父に昔話を語ってくれていたみたいです。

祖父は、子供のころから苦手な生き物があったんです。何だと思いますか。…ヘビ。ヘビは、すごい苦手だったんですね。夏に、一緒に野原とかでお散歩していると、おっきなステッキをもって、「マムシがいるといけない」と必要以上にバンバンバンバン叩きながら散歩したり。

ヘビ嫌いなのに、ヘビ年生まれなんです。家に当時はおっきな池があって鯉を飼っていたんですけど、今ぐらいの季節、カエルがね、ゲロゲロ鳴いていたんですけど、池があって蛙がいるとヘビが来るんですね。春は、ちっちゃいヘビの赤ちゃんがピチピチ溝にいたりしていたんですが、ヘビが嫌いなのにヘビ屋敷だったんです。祖父の作品を見ても、小鳥がアオダイショウに襲われるとか、私と一緒に見た、ジネズミの親子っていうのも、庭に来たねずみを、そういうヘビが襲うっていうのがあるんですけど、実際、家にいっぱいヘビが来ていたんですよ。

そうやってヘビ嫌いなんです。一方で、うちの、久保田家の守り神はヘビ。氏神様はヘビなんです。ヘビ嫌いなのに。それで、いつも私に言っていたことがあるんです。ちょうど、この世に私の生命が宿った日ぐらいの話を。実はね、「マヤの一生」という作品を書いたときに、その原稿を夏のある日に書き上げて、うちの母がその原稿を読んでぼろぼろ泣いたそうなんですけど、その書き上げた日に、うちの洗濯物の裏に大きなヘビが出たんですって。それで、うちの母

が「お父さんヘビが出ました」って言ったら、祖父が、「いやあ、ヘビはね、守り神だからこれはいいことがあるぞ」と。「孤島の野犬」を書いたときも、ヘビが出た。おっきなヘビがね。うちの守り神がヘビだから、今度の「マヤの一生」も、自分の中では、思いの丈を書けたっていう気持ちがあったみたいなんです。それと同時に、ちょうど私の母のお腹の中にちょうど私が宿ったってわかったところで、「今度の子は、無事に生まれるぞ」って。というのも、私の母は、一番最初の子ども……私のお姉さんになるんですけど、一番最初の子供を早産で3日目に亡くしてしまして。その後ずっと流産が続いて、私は7人目なんですね。やっと生まれたんです。だから宿ったところにすごく心配な母に、「ヘビは久保田家の守り神だから」って言ったんです。

だからいつもそのヘビの神様の話を私は聞かされていたんです。その、うちの守り神のヘビっていうのは、ご神体が、長野の裏にちっちゃい氏神様があるんですけど、そこの祠を開けると、黒い漆塗りのヘビが置いてあって。うちの母たちが結婚したときに見に行ったときはもうなかったらしいんですけど、昔、目には真っ赤なルビー、真っ赤な目が入っていたんだぞって。その、ヘビのお話をいろいろ聞かせてくれたんですね。祖父が初めて本当は開けちゃいけない、ご神体のヘビをそおっと見たときに、ヘビ嫌いの祖父は、「自分の家の氏神様が、守り神がヘビ！」って思って、もう気持ち悪くなるんですね。何だかね自分の体にヘビの血が流れているんじゃないか、鱗が生えているんじゃないかって気持ち悪くてたまらなくなっただけなんです。

その夜のこと。祖父は、ある夢を見たんです。隣の家のマサコさんと一緒におままごと遊びをしている。そうしたら突然マサコさんが、指さすんですね。そうすると鶏小屋の方から、おっきなヘビが出てくる。祖父たちめがけてね。近づいてきた。マサコさんは素早いから「タタタッ」って逃げるんですけど、祖父はとてものろい。逃げ遅れちゃって、おたおたしていると、そのヘビがぐるぐるぐるぐる足に巻きついてきた。「どうしよう。」って思っていたら、木の向こうに隠れているマサコさんが、「ヘビにおしっこかけなさい」って。「ヘビにおしっこかけると弱いだよ」って言って、「ほんまか」って言って祖父は頑張っておしっこをしようと思って、うんうん唸るんですけど、そういうときに限って、おしっこが出ない。やっと出てくれたと思って、気持ちよく、おしっこすると何とヘビが本当におしっこと一緒にとろとろ溶けていったっていうんですね。

それで、「ああ、よかった」と思っていたら、「ワーッ」という悲鳴が上がって、「わあ！坊主め、大しゅんべん俺の腹にいっぱいかけよって！」って言って、自分のお父さんに怒られたって言って、小学3年のときの思い出話をよく私にしてくれました。これは「ねしゅんべん物語」というのに載っていますが、祖父が親子読書の研修会で東北の岩手かどこかに講演で行ったときに、子供たちの、

おねしょしているお布団が掛けてあるのを見て、学校かどこかで自分のおねしょの話をしたら、何か喜んでくれて。自分がどちらかというと、勉強もお医者さんになったお姉さんに比べてできなかったり、運動もそんなに得意じゃなかったりって、劣等感をいっぱい持っている祖父だったのでね。いろんな、そういう子供の悲しみ、劣等感を植え付けるようなものを綺麗に取り除こうってする。そういうのも、児童文学に関わる者の役目だっていうことで。当時、祖父が当時のいろんな児童文学作家の方々に呼びかけて、寝しょんべんのお話を、それぞれ自分の思い出を書いてもらって、話にした。でもなかなかね、今はテレビとかでも、おしっことかうんことか、何かそういう漫画やアニメ

もあったり本があったりしますけれども、当時は、「そんなもの」って言って、どこの出版社も出してくれなかったそうなんです。祖父が編集して出したいって言うても、やっと出してくださったのがこの童心社さんらしいです。数年前まで、再版がかかっていまして、50年ぐらいロングセラー、100刷ぐらい。そのあとずっとロングセラーになっていましたが、そういうのを書いたりしているんですね。



祖父のそういう、子供のころの楽しみとか、ちっちゃい喜びみたいなものを書いている本とか自分の子供時代のことを書いているような本があるんですけども、その中で、私が小学校の1、2年生ぐらいの頃だったと思いますけれども、親戚のお葬式に行ったことで、「死ぬってどういうことだろう」って、怖くて怖くてたまらなくなりました。それまでも、虫が死んだらお墓作ってみたりとか、いろいろしていたんです。ちっちゃいときは、まだ自分の実感としてなかったんですけど、多分小2ぐらいのときにものすごく怖くなって。「大好きなおじいちゃんとかおばあちゃんが死んじゃったらどうしよう」って思って、寝ている祖父母に「息してるかなあ」って確かめたり、夜とかもう怖くなって、「おじいちゃんおばあちゃん死なないで」ってすごい泣いたりしたんですね。

そしたら祖父が、「ああ、俺も子供のときにそう思ったよ。人間っていうのは誰でも死ぬのが怖い。死ぬって思うのは怖いけど、子供のときはね、また格別に怖いよな。俺は、小学校5、6年ぐらいのときだったから、里花は、「死」を思う気持ちが早いな」って言いながら、自分のことを話してくれたんですね。

祖父の家の裏がお墓だったりしたこともあったりして、やっぱり「死ってどんなものだろう」って怖くなって、やっぱり私と一緒に、「ばば様が息してるかな

あ」って確かめたり、「死の手前まで感じてみたいな」って、息を止めてみたりね、いろいろしたらしいんですね。で、考えても考えてもわからない。

それで、家のお使いで頼まれて担任の先生に牛乳を持っていったときに、先生に聞いてみたんですね。

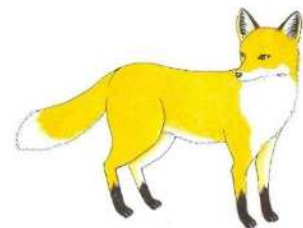
「先生、死ぬってどういうことかわかる本ってありますか。教えてください。」って。

そしたら先生が、「ううん」って考えて。「死ぬことと生きるっていうことは、紙の裏と表のようなものだ。切り離すことはできない。死ぬってことを先生はなかなか、言えないけれども、生きるっていうことがどんなに美しいか書いてある本があるよ」って言って渡したのが、「ハイジ」。

祖父は、家の裏にアカマツの林があってそこが大好きだったそうなんですけど、そこに、とっとととと、そのハイジの本を喜んで持って帰って、寝転がって読んだんですね。それで、読んでいると、こんなシーンに感動するんですね。ちょうどハイジが、初めて山に行って山の夕焼け見て綺麗だなんて思って帰ってきて、おじいちゃんに聞くんですね。アルムじいさんに。「おじいちゃん、夕焼けは何でこんなに美しいの」って聞くと、おじいちゃんが、「人間でも、自然でも、最後の別れの言葉が一番美しい。夕焼けってというのが、太陽が山々に向かってきょうならの挨拶のしるしだよ。だから、あんなに美しいんだ。」って言う。

このシーンに、祖父は、はっとして、「何て綺麗なんだろう」と思って本から顔を上げたら、ちょうど周りも夕やけで、自分の目の前に、南アルプスがそびえているんですけど、おんなじアルプスがやっぱり夕焼けていた。物語の世界に、ハイジと同じ世界に入っているって思う。

今まで何とも思ってなかった、当たり前と思っていた自分の周り。それが、「なんて、綺麗なとこに住んでいたんだろう」って思った。死ぬってことはわからないけど、なんて綺麗な美しいところに自分が住んでいるんだ。生きているってのが素晴らしいなと思ったっていうんですね。このときに、自然やふるさと、こういう美しさっていうのに祖父は目覚めたっていうんですね。そのときはね、読んだときは思わなかったけど、いつのまにか自分は自然を主体とした書く人間になっていた。小学校のときの感激っていうのが、運命の窓を開くかぎだったんだっていうことで、今も、県立図書館の中には、皆さん見たことがある人もいるかもしれませんが、祖父がよく色紙とかいろいろ書いていた「感動は人生の窓を開く」っていう、この言葉が飾られているんです。まあ、これは祖父にとってやっぱり、自分の生きてきた、一番の、運命を開いた一番の言葉だったんだって思うんです。



こうやって、文学、作家に目覚めた祖父。その祖父がどうして作家になったのか、どうして椋鳩十っていうペンネームをつけたのかっていうことをね、お話ししたいと思うんですけれども。

やっぱり、この、椋鳩十っていうペンネームなんですけれども、うちによく、子供さんたちが、私が小学校のときに、学校で習うので、訪ねてくるときにもやっぱり、「どうして椋鳩十って名前つけたんですか」って聞くんですね。そうすると、祖父がいつも言っていたのは、「ムクドリとハトが 10 羽いたんだよ」とか、「ムクノキにハトが 10 羽とまっていたんだよ」とか言っていたんです。ハトが 10 羽っていうのは、もう本当、そういうアバウトな、鳩が 10 羽、なんですけど、この椋っていうのがちょっと、ムクドリとかムクノキっていうよりかもちょっと意味がありまして。「小椋」というところからの椋なんです。

椋鳩十の誕生って書いていますけれども、実は祖父、大学を卒業して、鹿児島に加治木の高等女学校で教員をしていたんですが、やっぱり作家になりたいということで、自費出版するんです。「山窩調」っていう作品。ここで初めて椋鳩十っていうペンネームを考えてつけるんですけど、この「山窩調」のね「山窩」……山の民に、小椋っていう、姓が多いってことでそこからとった椋なんです。

それで、自費出版したんですけど、これがすごく、当時の文壇とかに称賛されて、新聞とか雑誌とか、いろんなところから執筆依頼がくるんです。半年後に、まとめたものを「鷺の唄」という作品名でちゃんとした出版社から出すんですが、これが実は、発売後たった 1 週間で発禁処分になるんです。というのも、当時のちょうど昭和 8 年というのは、時代的にも、国連脱退したり、小林多喜二さんが獄中で殺されたりといった時代。ちょうど戦争に向かい始めるとき。そういう言葉の弾圧が始まったところに、祖父の書いたものは、よくないっていうことだったんです。これから作家の第一歩を踏み出したというところで、もう本当に絶望。落胆……。

そんなときに、祖父に声をかけてくださったのが、「少年倶楽部」っていう雑誌の編集者さん。その山窩小説には、生き生きした少年たちが出てくる。それで、その頃の野性的な子供たちの物語をその雑誌に書かないかって言ってくれたんです。

祖父は、どうやったら書けるだろうって考えて、動物の生態、それを科学的にとらえたら書けるんじゃないかっていうふうに考えるんですね。というのも、やっぱり、言論弾圧を受けた人なので、人間でいろいろ書くと、統制されてしまう

から。動物を書こうと思ったときに、山で、子供のころから、いっぱいいろんな動物を見てきたんですけど、いざ書こうとすると、なかなかどうしていいかわからない。

それで、祖父は、まず女郎グモとかいろいろ、飼ってみる。女郎グモは、加治木だったので、「くも合戦」で有名な女郎グモを飼って、いっぱい飼ったり、アリとかムカデとかそういう虫を飼って観察日記を書いたり、家に来るねずみとかヘビとか小鳥たちスズメやいろんなの、飛んでくる虫や鳥とか、猫とか犬とかを飼ったり、いろいろ、観察するんです。

それでも、野生の動物の生態がわからない。

今みたいに、テレビとかそういうのもない時代なので、どうすればいいだろうって必死に考えたのが、狩人さんなら、野生といつも接しているので、一番生態を良く知っているんじゃないかって言って狩人さんのところに行っていていろいろ野生の動物の話聞くようになった。それで「少年倶楽部」に15遍ぐらい発表した。

その中の7番目の作品が、今でも国語の教科書に載っている「大造じいさんとガン」なんです。ちょうど戦時中で、戦争っていうのはやっぱり「戦って死ぬ」っていうことが名誉だっていう、そういうときなので、逆に「生きる」っていうこと、それがどんなに美しいか尊いか。そういう、親子の愛情とか、「生きるため」っていうことをなかなか人間の創作物では書き表しづらい、また言論統制を受けるかもしれないっていうことで、野生動物の姿を借りて、思いを込めて書いたんです。これが戦時中に、「少年倶楽部」で15遍ぐらい。これがきっかけで祖父は300冊以上の動物物語を書くことになるんです。戦時中っていうのは、主人公の動物は決して死なない。殺さないふうにならされている。これも祖父の思いがこもっているんだろうなと思います。



ちなみに「少年倶楽部」の、どんな雑誌だったかって、ちょっと載せていますが、皆さんは今、朝ドラの「あんぱん」をご覧になっているかなと思うんですが、中学生のたかし君が小脇に、この「少年倶楽部」の雑誌を抱えていたり、漫画をばらばら見ていたりしていましたし、お友達役の高橋文哉君かな。よく、のぶちゃんの妹に「のらくろ、のらくろ」って言ったりしていますけど、当時のその「のらくろ」とかが掲載されていた雑誌。あと、江戸川乱歩さんの「怪人二十面相」とか。当時の男の子たちにとって、もう絶大な人気の雑誌、そういう雑誌だったんですけどね。

でもそういう雑誌に祖父は、ずっと動物ものを掲載していた。ここにもあるようにどちらかというと戦争を高揚するような作品が多い中で、祖父はずっと動物の、愛とか命とかの尊さを書き続けた。そういうのが、祖父の特徴の1つとなっていく。取材力っていうのもすごく、祖父の大きな魅力だって言われるんですけど。雑誌にやっぱり皆さんがよく知っているこの「大造じいさんとガン」。これは最初にも言ったように真珠湾攻撃の1か月前に発表された作品で、ここに込められている思いっていうのが、やっぱり戦争も直前なので、どんどんもう、いろんなものが規制されている。そういう中で、自由に発言もね、やっぱり、言えない。言えなくなっている。言いたいことも言えない。そういうときに、もう正々堂々と「良い悪い」の議論もできない。そういう時代に、何かこう、言葉ではみんなには言えないけれども、何かこう、立ち向かう。そういう思いを残雪っていうガンに託して書いたっていうのが、「大造じいさんとガン」なんですね。

「大造じいさんとガン」は、前書きがあるのとなないと、今も教科書でいろいろあるんですけど、もともと祖父は前書きを書いて雑誌に出していたんです。でも、雑誌が前書きをとって、また、自分で発表するときに、前書きがあるっていうのも知ってるので、教科書によっては前書きがあったり、なかったり。鹿児島のは、ちゃんと前書きがあるんですが、前書きがあるから、栗野岳の話ってわかりますし、前書きがあるから、この大造じいさん、おじいさんってなっているけどガンと闘っているのは、30代半ばぐらいの人なんだなっていうのがわかるんですが。

この前書きを見ると、最初に「知り合いの狩人に誘われて、イノシシ狩りに出かけた」って書いているんですね。イノシシ狩りに出かけたのに、祖父はガンのことを書いている。その時にね、そこにいた人から、ガンのこと、昔ここにガンが来たんだよ。ということで、いろいろ聞いて、懐かしくなって、この物語を書いたみたいなんです。

懐かしくなったっていう言葉を祖父が他で書いているんですが、子供の頃に、上空を飛ぶガンに対して、みんなでね、喜んで「ガンガン竿になれカギになれ」っていつも歌っていた。

ガンっていうのは日本人にとって特別な存在で、昔の平安とかそういう時代から、ずうっと日本では、作品にガンっていうのが登場してくる。

そういう特別な存在の、多分祖父が、子供の頃、やっぱり上空を飛んでいるガンを思い出したんだろうなと思いますし、この最初の前書きのところに、そのおじいさんに聞いている様子。



その「大きな丸太がパチパチ燃え上がり」ってこれ、囲炉裏端で聞いているんですね。子供の頃、ばば様に昔話を語ってもらった、そういうことを、鹿児島にいて、子供のころの幸せだったそういうのも思い出した中での、「大造じいさんとガン」なのかなあと私は思ったりしています。

その「大造じいさんとガン」……さっき、狩人さんに取材に行ったらって言いましてけど、その取材に行って書いた初めての作品なんですね。だから祖父にとってはいろんな意味で「大造じいさんとガン」っていうのは、大切な作品なのかなあと思うんです。

今も教科書に載っているっていうことで、いろんな人が今でも読んでくださっていますが、例えば、以前、千葉経済大学の学長さんが、「残雪に品格を感じる」って書いてくださっているんですね。「残雪の立ち居振る舞い。こういうのに、品格というものは現れるんじゃないか。」というふうに書いてくださっている。最近ですと、NEWSの加藤シゲアキさん。作家でもあるんですけど、加藤シゲアキさんが、去年の6月から何回かこの「大造じいさんとガン」について、結構言ってくさっているんですね。加藤シゲアキさんは、小学校の国語好きじゃなかったんだけど、先生から感想画を書いてって言われて感想画を描くことになって読んで、この「大造じいさんとガン」もすごく面白いな、いいなと思ったそうなんです。この「大造じいさんをガン」の物語から、何かその、残雪の生きざまとか、大造じいさんのフェアネスなのか、何かわからないけど、何かをもらった気がしたっていうことで、感想画に黄色くなんていうのかな、紙一面黄色く塗ってそこに真っ白い箱に赤いリボンつけた感想画を描いたっていうのを書いてくださっていて、これをね、その出版社さんが、「もうすごいやっぱりすごい感性なんですよ」って送ってくださったんです。

加藤シゲアキさんは、2か月ぐらい前もWebの方でそういうことを発信してくさっていました。「大造じいさんとガン」、みんな読むと、感想画っていうのは、自分以外の友達とかは、ガンが飛んでいたり狩人さんがねらったりとかしている。そういう絵を描いていて、自分だけがプレゼントの絵を描いていた。それっていうのは、自分から見れば他の人は感想じゃなくて好きなシーンを書いたんじゃないかみたいなね。いやなんかすごいなあと思ったんですけども、今でもこうやって、椋鳩十のことを、「大造じいさんとガン」がいいなと思ってこうして考えてくださる人がいるっていうのは私もとってもうれしいことだなあと思っているんです。

次に、県立図書館長としての祖父のことをお話ししようと思うんですけども、ちょうど今、切りがいいところなので、しばらく、ここで一旦休憩にしたいと思います。

<15 分ほど休憩>



では、第2部ということで、祖父の図書館長時代で、親子読書のこと、今日はそのための話なので、そういうことを今からいろいろとお伝えしたいなあとします。

今日も最初にお話がありましたけれども、約20年、祖父は図書館長を勤めたんですね。で、戦後の祖父が勤めた頃の、敗戦直後の日本っていうのは、図書館っていう役割が日本ではとっても大切だった。というのも、やっぱり、戦時中の軍国主義から今度は文化国家として再出発しなきゃいけない。その中で、図書館は、やっぱり一番文化的なところっていうのもあります。しかもですね、この鹿児島市は93%以上が焼けてしまって、ほとんど焼け野原。どこからでも桜島が見えちゃうぐらい焼け野原。その中で、鹿児島の県立図書館、今の博物館、照国神社前のあたりにありますけど、あそこが焼け残った鹿児島県唯一の教育機関だったんですね。だから、特に重要だった。

祖父の前の館長さん、戦時中からいらっしゃった方が急にやめなきゃいけなくなってしまうと、誰が次の館長さんになるかって、新聞でも、ものすごく「誰が、どんな人がなればいいんだろう」って言われた中で、祖父が選ばれるんですね。でも、「椋鳩十だから選ばれたんだろう」って、今だったら皆さん思うかもしれないんですけど、当時の祖父は全く無名なんですね。さっき言ったように、「山窩調」というので一時、バーッと自費出版したので、世間に知られて。でも、半年で駄目になってしまった後は、ほとんど知られてない。そういう祖父が、加治木の高校の先生をしていた祖父が、なぜか選ばれたんですね。

もしかしたら、何かを思ってくださったのかもしれないんですが、42歳の祖父は、自分にかかった重責を、「どうしよう」って思ったと思います。だから、その約20年、本当に全精力を図書館に注ぎ込んだ。文化的施設で、鹿児島の文化の顔にならなきゃいけないっていうことで、もう本当に注ぎ込んだ。だからうちの父も祖母も、「いつ祖父は寝ていたんだろう」っていつも言っていたぐらい。家でも9時ぐらいに帰って、次の日の朝、お風呂に入って、図書館に行って、図書館でも、次から次に新しいことを考え出してっていうので、もう本当に目まぐるしかったみたいです。

そういう祖父なんですが、ここにも「文化の顔」って書いていますが、文化サロンみたいな感じでいろんな人が、図書館長室に、誰でも入れるようにしていた、開放していたっていうので、文化サロン、そういう感じだったんです。祖父が図書館長になって10日目にですね、まずGHQに呼び出されて、すごく怒られる

んですね。というのも、当時、軍国主義的な本は焼き捨てなきゃいけない、焼き捨てろってということで、日本全国、本を焼き捨てた。命令されて。本当はね、図書館の本焼き捨てるってことしちゃいけない行為らしいんですけど、焼き捨てたんですね、鹿児島は、祖父の前の方がずっと守っていて焼き捨ててなかった。祖父は10日目に、GHQから「焼き捨てろ。」って怒られて、その時に、祖父は、「焼き捨てたくない。」っていうんじゃなくて、「県立図書館だから焼き捨てない。公共図書館は、国民が調査研究し、知り、考える目的のところだ。」って言うんですね。「どうして戦争になったのか、後々それを考え、将来どうしたらいいのかっていうことを知るために、大切。守らなきゃいけない。焼き捨てることはできない。」ってということで、守った。守ったっていうか、そういう説明をしたらGHQも、「そういうことなら。」って。本当は、図書館は焼き捨てることしちゃいけないってことになっているのがわかっていたと思うんですけど。県立図書館の本は守られて、「追放図書」としてしまわれることになった。

全国でもかなり焼き捨てていまして、図書館、県立図書館にあるその「追放図書」って言われる800冊ぐらいっていうのは本当に、全国でも類を見ない数だそうなんですね。私も、子供の頃、父とか祖母が、「おじいちゃんね、GHQに逆らって本当に怖かった。どうなるかと思った。」って言っていたんですよ。私は、その怖さなんて何もわかんなかったのでも「何でかな。」って、学校の教科書でも、マッカーサーとか、「かっこよさそうだな。」くらいしか思ってなかったんですけど。なるほど本当に何か意見すると捕まってしまうとか本当に占領されているわけですから、怖かったんだなあと思います。祖父は自分の最初の自費出版も、言論弾圧を受けて、戦時中も自由に書けなかった。そういうことで、やっぱり自由に物を言わなきゃいけない。その自由っていうのをすごく大事にしていたと思うんですね。

追放図書は、他のところも焼き捨てていますので、やっぱり県立図書館の職員の方々が、93%も市内が燃えている中、必死に本を守り、戦火の中、運んで、そのあと焼き捨てなかった。その思いとか、実は図書館戦争とかにも重なっちゃうんですけども。図書館の自由に関する宣言というのは昭和29年にできているので、そういう、図書館の在り方っていうのは、まだない時期。そのときに、図書館で守ったっていうことで、秋から県立図書館で、この追放図書は展示されるっていうことなので、ぜひその機会に皆さんに見ていただきたいなあと思いますね。

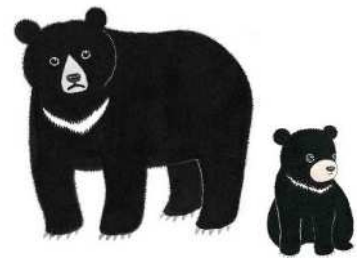


祖父がまず取り組んだことっていうのは、巡回文庫っていうものなんですけど、祖父は昭和22年の11月に図書館長に急に抜擢されて、その次の昭和23年

の春に、全国でも2番目にブックモバイル、ジープなのかな、大きな車を買うんですね。これは、当時のGHQの指導で、「日本は、移動図書館をするべきだ」って推奨されていたんですけれども。全国で2番目って言いますけど、祖父は館長になって、すぐ買ったんですね。

当時、購入費は15万円だったみたいなんですけれども、6万円しか予算がなかったそうで、あとは、自分の手出し。私が子供時代から30年以上経っても、うちの祖母がずっとぶつぶつ言っていました。祖父は学校を退職した退職金と、ちょうど著作で入った原稿料を全部持ち出して買ったそうなんです、「後で返す」って。結局、家に返さなかったらしいんですけど。祖母は、「あのときに、あのお金があったらどんなに楽だったか」と。子供が4人いたので、ちょうどインフレがすごかった時期。本当に苦労したみたいで、ずうっとずうっと言われて、祖父はいつも申し訳なさそうに黙っていましたけど。

その、ブックモバイル、今でも「すばる号」って6代目があるんですが、GHQが推進していたのは、移動図書館なんですけど、それだと定期的にその車が来たときにしか本が来ない。鹿児島は島や遠いところがある。そういう中で、祖父は、そういう遠いところにも拠点を作って、そこに配本するための車として、どうしても欲しかったんですね。各拠点を作ってもらって、鹿児島県立図書館が本を購入して、それを、できるだけ多くの人たちに本を届けるために使う。それが巡回文庫なんですけど、なんか簡単そうに見えて、とても珍しい取組ってということで、GHQの方から、「これは珍しい」って文部省が言われたみたいで、実現はしなかったみたいなんですけど、映画化の計画もあったみたいなんです。「これは海外にも紹介したい」みたいな、そういう記事を見つけたんですけれども、それぐらい「みんなに本を届けなきゃいけない」っていう思い。結局これが後々の「鹿児島方式」っていうふうになっていくと思うんですけれども、「多くの人に本を届ける。」「本で、読書で、ヒューマニズム運動を起こしたい」みたいに最初の抱負にも祖父は書いてましたけれども、そういう本への思いっていうのはね、とても、とても強く持って、「どうやってみんなに、本を読んでもらうようにすればいいか」っていうのを考えていました。



今日も館長さんがお話されたと思いますけれども、大きな取組としては、「農業文庫」っていうのをするんですね。当時、昭和20年代でも、敗戦後、日本はすごく食糧難。食料っていうのがとっても大切なとき。鹿児島は、本当に農業国なんですけれども、貧しい。でも食糧難で「農家を育てよう」っていう気持ち、「みんなの心を豊かにしよう。農家を育てよう」っていう気持ちで「農業文庫」

をしたそうなんです。

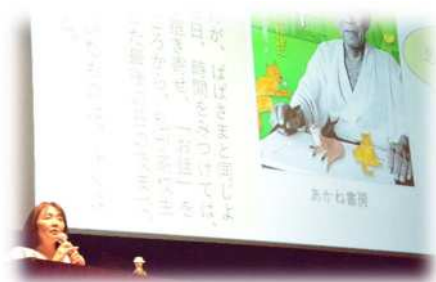
農業文庫をしているときに祖父は、はっと気づいたんですね。各家庭に本が1冊もない家がたくさんある。お母さんとかが、学校を卒業した後、1冊も本を読んでない人もたくさんいる。これを何とかするには、家庭に、家に本を入れなきゃいけないってことをずっと考えだすんですね。

ちょうど昭和 31 年にアメリカの方にも呼ばれて研修して、「どうしたら本を各家庭に届けられるようにできるのか」っていうふうに、思って考えたのが、「母と子の 20 分間読書運動」。今日、発表してくださった、さつま町の前の流水小学校で1年間研究して、鹿児島から、全国に広めていった。

祖父は読書の大切さっていうのがずっと頭にあるので、みんなに読んでもらいたいっていうのはもちろんですけど、「心のかけ橋にしたい」っていうのがやっぱり大きかったと思います。

最初は家に本がない。逆に家で読んだら怒られたみたいなのがあったりする、そういう時代なので、お母さんとか、家の人に読んであげる。子供が読んであげるっていうのが最初なんです。

子供、ちっちゃい子には、自分が、ばば様から聞いてきたような、囲炉裏端でずうっと昔話を聞いた、心にずうっと残っているような声や、おばあさんだけじゃなくて、学校の先生が読んでくれたり大好きな先輩が読んでくれたり、また友達と読み合ったり、そういう「読む」というときの声っていうのが、やっぱり祖父の中では、1つ、とても大切なことだったんじゃないかなあって思うんですね。



祖父は、感動っていう言葉をよく言うんですけども、やっぱり出会いとかいろんなもので、人っていうのは変わる。その、「感動」ってのが人間をすごく変えるって、何に出会うか何かどうするのかっていうのが、子供の多感なときって一番大切なんだっていう思いがあって、その中で本の感動ってのがとっても大切だっていう気持ちがあったと思います。

そういう中で、やっぱり子供は「見る、聞く、読む」が心を形成するっていう思い。これは、自分のおばあさんのことを思っているんですけども。昔の囲炉裏のところでもずうっと昔話を聞いた。これで自分の心の核が作られた。そのおばあさんの言葉、思い出っていうのは、ずうっと年をとっても、自分の中に、心にずうっと残っている、自分の心の基本っていうのは、おばあさん。ばば様。その

おばあさんが形作ってくれたんだっていうその思いっていうのはずうっと、あったと思うんですね。祖父は82歳で亡くなっていますが、80歳になったぐらいの頃、中学時代、十代の頃に亡くなったおばあさんの写真が遠い親戚の家から出てきたって言ってうちに送られてきたんですね。昔は写真がそんなになかったらしいので、もう本当に70年ぶり、60何年ぶりに、そのおばあさんの姿を写真で見て、もう80歳の祖父が抱き締めて泣いたのを私は覚えていますね。

そうやって、おばあさん、ばば様の声っていうのは祖父の中でずうっと心に残っていた。その思いが、『すつとびこぞうとふしぎなくに』っていう作品があるんですけど、ここにも、あらわれているかなあって思うんです。

祖父は動物物語をいっぱい書いていて皆さん思われると思うんですけど、他にもいろいろ民話も書いていたり、あと不思議な空想物語も書いていたりするんですけど。この『すつとびこぞうとふしぎなくに』っていうのは、主人公の男の子が「すつとびこぞう」っていう何でもできる小人に、「死なない国、死ぬことのない国に連れてって欲しい」って言って、死なない国、死ぬことがない国に行く。そこで、もう3000年ずうっと額の中にぺちゃんこにされても、死なないで生きている王女様と出会うっていう、お話なんですけど、若いとき、詩人のときに書いていたようなのがあるんです。この本の後書きにも、ばば様への思いっていうのが入っているんですね。ばば様が自分を膝に乗付けて、「すつとびこぞうの歌」を歌ってくれた。この『すつとびこぞうとふしぎなくに』の作品の中に、その「すつとびこぞうの歌」っていうのが、入っているんですけど、「♪私はお山のすつとびこぞう。花折りゆこうや。一本折って腰に差し、二本折っては手に持って、三本目には日が暮れた♪」っていう歌が載っているんです。

祖父が子供のころから聞いていたっていうのを児童文学を書く前からいろんなエッセイに、「向かいの山に猿が三匹並んで、ぼうさ、ぼうさ花折りゆかまいか。一本折っては腰に差し、二本折っては手に持って、三本目には日が暮れた」っていうのをいつも聞いていたって、思い出の歌のことをよく書いているんですけど、そういう、ばば様から聞いた思い出の歌、その時に聞いた話、楽しさっていうのがこの中に入っているのかなあって思うんですね。と同時に、この「すつとびこぞう」に肉付けして4歳の孫に風呂に入りながら語り聞かせた。私にね。その「すつとびこぞう」の歌は聞いてないんですね多分。祖父は、本当に歌が下手なので、あんまり人前で喜んで歌わなかった。祖父のいろんな童歌とか、歌っていたようなのは、さっきの「七草の歌」とかは、「こんなのあった？」って言ったら祖母とか、母がその時に歌ってくれたから知っているんですけど、多分この「すつとびこぞう」や「猿のどうの……」っていう歌は祖父の故郷のあたりの歌なので、皆知らないの、歌わなかったと思うんですけども。

一番私が大好きだったのは、海坊主の話。祖父が海坊主の妖怪の話をしながら、「海坊主がやってきた！」って言って、お風呂の湯船でバタバタして、おぼれてブクブク沈んでいくんですね。タオルをブクブクって空気入れてブクブクしながら、「海坊主きた！」って言って、「足を引っ張られた！」って沈んでバタバタ溺れるのを、私が「おじいちゃん、海坊主に連れて行かれないで！」って言って引っ張って助けようとして騒いで、ちっちゃい3、4歳の私がはだかんぼうで駆け回って、周りをもうベチャベチャにして。それは、温泉でもやったので、周りの人にすごく怒られたっていうのもあるんですけど。そうやっていつもお話してくれたりしたんですが、そういう、何ですかね、おじいちゃんになっての思いと、そういうのも合わさって書いてくれた話かなあとと思っています。この頃っていうのは、他にも『けむり仙人』とか、いろんな不思議な話を書いたりしているんですけど、おじいちゃんになって、そういう気分でね、孫や読者に語り聞かせたいっていう思いもあったかなと思います。

この「すつとびこぞう」だけじゃなくって、私には、いろいろとね、本を通して遊びっていうのをしてくれましたね。祖父は、「本好きな子供にするには」みたいなのを書いて、「読みなさい！読みなさい！」と言ったら、どんどんどんどん本から遠ざかってしまう。

遠い昔のいろり端で、ばば様たちが語り聞かせたような、読書遊びみたいな、そういう気持ちで、本と接するっていうのが、子供を本好きにするんじゃないかって書いているんですけど、私と一番よく遊んでくれたのは、「ハイジごっこ」。

ちょうど、私がちっちゃい頃、アニメで「ハイジ」とかやっていたんですけど、ハイジの、アルムじいさん役がうちの祖父で、私がハイジ役で、応接間とか2人きりになれる部屋に行って、台所から牛乳とか、チーズとかパンとか持ってきて、ハイジのつもりでおじいちゃんと一緒に食べたり飲んだりしながら、窓から見える庭に来る野鳥のこととか、いろいろ話してくれる。それだけでハイジの世界にいるようにわくわくなくなって楽しかったんです。毎日、日課としてやっていたのがあって、夕方になると必ず、祖父と一緒に庭に出て。うちの庭から前は城山の裏手なんですけれども、ちょうどうちは、ちょっと高台になっていて、城山の山がちょうど谷間の向こうに見えるんですね。祖父が、「あの山の向こうにね。里花の好きなハイジとかペーターが住んでいるかもしれないぞ。おっきな声で読んでみたら返事をしてくれるぞ。」って言って。私が「ハイジー！」っていうと、何かかすかに山が、本当に、かすかにこだまするんですね。ちょっと谷の向こうの方で、「ハイジー！」とか「ペーター！」って。それが何かやっぱ嬉しくって、「おじいちゃんも一緒に呼ぼうよ。」って言って、夕方いつも祖父と大きな声を出して、「ハイジー！」「ペーター！」「クララー！」とか呼んでいたんですね。

私、小学校に上がったら、その下の谷間の下の方に住んでいたお母さん方から、「いつも、子供の声が、大きな2人の声が聞こえてた。」って言われましたけど、そうやって、一緒になって祖父は思いっきり、お風呂のことにしてもハイジにしても、一緒になって楽しんで遊んでくれた。そういう中で、私もハイジの本とか大好きになって好きなページは暗記して、祖父の前で読んだり、「この、この、こういうところが大好き。」って言ったりしていたんですけれども。そうやって、一緒に遊びながら物語の中に入りながらってというのは大切なことなのかなと思います。

実際、私、「うちの娘はどうだろう」とか思って、娘が小さい時にピーターパンとかが大好きだったので、「山にピーターパンとかティンカーベルがいるかもよ。」って言ったら、私と同じように、大きな声で叫んで呼んで、しばらく本当に「妖精がいる。ティンカーベルが向こうに住んでいる」って信じて。幼稚園で、「そんなのいないよ。」っていう男の子とけんかしたりしていたんですけど。やっぱり小さい頃って本当に、その世界に入り込むんだなって思うんですね。



祖父はさっき言ったように、『ねしょんべんものがたり』もなんですけど、「子供たちの劣等感を取り除きたい」そういう思いっていうのもいっぱいあったのかなって思うんですね。やっぱり自分が運命の書っていえるのと出会ったことで、感動が人生を変えてくれたっていうものもいっぱいあったと思います。国務省から呼ばれてアメリカに4か月ぐらい視察に行ったときに、落第生の読書研究をしてるっていうのも知るんですね。やっぱり本をいっぱい読める、読んでる子っていうのが、いろんな意味でいいっていうのを学んでくる。いろんな意味で、心にとってもいろんな意味で、本っていうのは大切なあと思っていたって思うんですね。それで、やっぱりその中で、読んでもらおう。あと、読んであげるっていう大切さっていうのも、やっぱりずっと祖父が言っていたことの1つかなあって思うんですね。

そういう劣等感っていうことも1つにあるんですけれども、祖父が亡くなる4か月ぐらい前に、自分の地元の小学校で、『人間は素晴らしい』っていう本になっているんですけど、今年の2月ぐらいもNHKで再放送してくださっていたんですが、子供たちに語りかける授業をするんです。トカゲはしっぽを切って逃げていく能力がある。うさぎは、ぴょんぴょん。大きな耳で自分を守る能力がある。いろんな動物は、それぞれいろんな能力を持っている。人間は、その中でも一人一人、自分でも分からない能力を持っているんだよということで、自分で

も分からない能力をどうすれば分かるようになるのかっていうと、それは感動しかないんだよって。感動は、どうしたら、生まれるのかっていうと、いろんな感動があるけど、本を読んだり、そういうこともしてると自然と湧いてくる力がどこかで出てくるんだよっていうことを言っているって。そういう、子供たちへの思いっていうのは、祖父はずうっと、持ち続けたなあとは思っているんですね。

祖父の児童文学への思いっていうのは、「児童文学は祈りの灯を焚く文学だ」っていうふうに書いているんですけど。人間、いかに生きるべきか。そういういろんな思い、祈りのような思いを、児童文学に載せたいんだっていう思いがありました。動物ものの、温かい命の物語だけではなくて例えば、自然をずっと見つめてきた祖父の中では、公害を扱った日本では、そういう最初の本になりますけれども、『におい山脈』っていう作品でも、そんな思いを書いているんです。



祖父の作品の中で今年は特に皆さんに手に取ってもらいたいと思うのが『マヤの一生』です。これは、戦時中に、実際に飼っていた「マヤ」っていう犬の話なんですけれども、この中で、実際に生き物が大好きで、マヤと、一番仲がよかったっていうのが、私の父なので、子供のころから父とか祖父とか祖母からこの犬の「マヤ」の話ってのは聞いて育ったんですが。この「マヤ」は、戦争で殺されてしまう。殺されるっていうのは、犬の献納運動っていうのがあって、これは鹿児島だけじゃなくて日本全国で起こっていたこと。でも、最近はずっとは知られるようになったんですけど、祖父が書いた頃はほとんどまだ知られてなかった。でも、本当に死んでしまう、殺されてしまった。ほとんど 80%以上は事実だよって祖父は書いてますけれども。

ここで祖父が伝えたかったメッセージっていうのは、やっぱり、私の父をモデルにした次男とマヤとの「どんなことをしても切れない愛情」っていうのもありますし、もう 1 つはやっぱり戦争の愚かさっていうのもあるんですけど、その愚かさの中で、人のよかった優しかった普通の人たちが、異常な状況の中で、心が変わっていく。そういう「怖さ」やそういう「空気に流されないことの大切さ」っていうのも、すごく祖父の言いたいことだったと思います。っていうのはやっぱり、今日何回も言っているように、祖父は自由に発言できることっていうのをずうっと大切にしてきた作家で、そういう思いをずっと持ち続けた作家なのかなあと思っています。

戦争だけじゃなくて、最近でも、例えばコロナのときとかも、そういう異常なときに、「あそこの人がコロナになった」とか、なんかいろんな噂ですとか、そういうので、追い詰めるようなことがあったり、ネット社会で追い詰めるようなことがあったり。そういう世の中の大きな空気に流されない、いろんなことを自由に発言できるっていうことは、今とっても大切なことなのかなあと感じています。



この「活字の林をさまよい、思考の泉のほとりにたたずむ」っていうこの言葉は、家の茶の間、私、居間じゃなくて昔から茶の間って呼んでいるんですけど、茶の間と書斎にずっとかけていた、祖父が自分で書いていた言葉なんですけど、その祖父は、「頭はね、やわらかく、うんとやわらかくしなきゃいけないよ。」って言っていました。「物事はいろんな角度から見るべきで、例えば桜島は鹿児島市からこう見えても、いろんなところから見ると、姿が変わって見えるんだよ。」って言っていたんですけど、「うんとやわらかく、教養を高めるっていうことが大切だよ。」っていうのをよく言っているんですね。そのためには、いっぱい本を読むこと。

この前も児童出版さんのところに行ったんですけども。今、絵本は児童書でも売れるらしいんです。ただ、読み物が全然売れなくなって、本当に出せない。祖父の全集も今ストップしています。そういう中で、学年が上の子たちも、長い読み物じゃなくて、ショートストーリーなら読む。パパッとスマホとかでできる、そんな感じのなら読めるというふうになっている。やっぱり読書の大切さっていうのは、読み聞かせとか祖父、祖母の昔話りのようなもので、いっぱい心の中に核をつくって、またいろんなものを読めるようになっていく。今の世の中でも本当に大切だなあと感じますし、こうやって県立図書館がずっと親子読書の運動を続けてくださって、皆さんがこうやってずっと続けてくださっている。やっぱり、鹿児島が読書をずっと守り、子供たちにもいろんなものを読めるような環境を作っていただいているっていうのはありがた



いなと思います。

今年、祖父の棕鳩十の「ハト」っていうのにちなんで、今日皆さんの資料にもお渡ししていますが、「鳩の日」っていうのを、私の仲のよい人たちが、「祖父の日があったらいいな」ということで、私が、「棕鳩十のハトっていうネーミングのよさで広まればいいな」と思って、今年の夏、いろんな方々が協力してくださって、ハトの日が、8月、夏休みに、いろんなところで開催されます。今年に限らずこれがずっと続けばいいなと思いますし、鹿児島から本の大切さっていうのが、またみんなに見直されていけばいいなと思います。二次元コードを読み取っていただくと、またどんどんどんいろんなイベントが上がってきますので、よろしかったらそれもお覧になってください。

ちょうど時間になりましたので、こちらで、今日のお話、終わりたいと思います。どうもありがとうございました。